〔東京家政大学研究紀要　第34集 (1), p.119～123, 1994〕

保育実習の諸問題－(2)－
――実習日誌から考える――

保　延　成　子

(平成5年10月7日受理)

The Issues of "Nursing Practice" —(2)—
—Cocerving a Review of "Practice Diary"—

Shigeko HONOBE

(Received October 7, 1993)

I. はじめに

本学の児童学科・保育科のみならず，保育者養成において，「実習」のもつ意味は大きなものがある．実際の体験を通して，学生たちは考えていること，思っていることなどを確認することになるのである．この確かめをするためにも，実習日誌は必らず欠かせないものとなる．しかしながら実際の経験を通して得たものを，本当に学生たちは，実習した事を素直に，また，ありのままに「日誌」に書いているのだろうか．どうしても学生の生の声を聞いてみたいという思いに駆られる．

そこで「実習日誌に書けなかったこと」について，学生たちにレポートを提出してもらい，教員の側でいくつか考えてみることが必要となってくるのである．このことは前回にも述べているところであるが[1]，ある保育者養成校の先生方との研究会で，「実習」をめぐる問題について考えていた時に，「日誌」のもつ意味について話し合ったことがあった．そこでは，「日誌」に書かれている事柄は，それをそのまま受け取ってよいのかどうか，また，「書けなかった事」という事柄を読みとらなくてはならないのではないか，というような事が話し合われたのであった．

このようなことに示唆を得て，われわれは「実習日誌に書けなかった事」について考えてきたのであった．今保育実習については直接的な指導を離れ，福祉系の科目を担当しているなかで，「社会福祉実習」を通して，学生の「ホンネ」を知る意味でも，このような作業が必要なのではないかと考えてきたのである[2]．

学生たちが「実習」を通して，何を学び，何を感じてきたのかを「日誌」に書かれてあることは，もちろん，その中にはみられない部分を知るということで，レポートの中に書かれている事柄についていくつかまとめていきたいと考えている．

児童学科　社会福祉資料室

II. 実習へのかかわりとしての日誌

教育・保育実習指導を直接担当することから離れてから久しいが，実習前後の学生たちとの話し合いからは離れることができずにいる．福祉系の実習を担当する一員として，ここ数年関わってきているが，実習ということでは全く関係のないこととしては考えられないことである．

社会福祉実習においても「日誌」は欠かせないものであり，ここでの日誌にもいろいろな問題が出てきている．ところで日誌のもつ意味は大きいとはいってもいろいろである．学生にとっては「日誌がなければとても気楽に実習に臨めるのに」とはいうものの，日誌がなければ，けじめのない体験で終わってしまうのである．

さて，日誌の何が大変なのであろうか．ひとつは強制されているという気持ちではないだろうか．実習に行くという気持ちだけでも，学生にとって，その負担は大きなものである．あせりと緊張とで不安になっている．実習は実際に「生きている」存在そのものを対象にしているだけに，さまざまな危険をともなっているのである．そのような不安も実習に入れば，学生たちはそれなりに順応し，子どもたちとも楽しそうに接触している．しかし，子どもたちとの関係では，すぐに慣れてしまっても，先生方への緊張はなかなか解消されないようである．先生方の中には，実習生が来ること事態，面倒がられ，実習中それが尾をひくこともある．ましてや「日誌」に毎

日，目を通してもらうこともままならないというところもあり，肩身のせまい思いをしていることもある．

心身ともに疲れきって家（あるいは宿舎）に帰る．そして夜遅くまで，その日の出来事をまとめなければならないのである．そうした日々のなか，子どもたちと実習生との関わりをかいま見ていくのである．そのなかで，日誌に「ホンネ」を書いていいのか，あるいは「タテマエ」を書くべきなのかを考える．

日誌は「ありのままに」書くのが本当ではあるが，実際のところはどうなのであろうか．以前の学生でまさに「思うがまま」に書きとめていた学生がいた．しかし，最後には挫折してしまい，「タテマエ」を書いたという学生がいたのである．

ところで，われわれがこのようなアンケートを求め，分析しようとすると，ともすれば実習生を受け入れ，指導していただいた実習先や担当の先生方の「アラ探し」をしているようにみられかねない．しかし，われわれは決してそのようなことを意図しているのではなく，あくまで，今の学生たちの「ホンネ」を知りたいというだけなのであることをいっておかなくてはならない．

Ⅲ．実習日誌に書けなかった事

(1)　職員と実習生との関係

イ）保育所で帰るとき先生方に「お疲れ様でした」と挨拶をしたら反省会のときに，お疲れ様というのは仲間同士で使う言葉であって，実習生が使うべきではないという内容の注意をうけました．「お疲れ様」というのは，目上の人に対して使う言葉だと聞いていたので，別にいいと思ったし，仲間同士で使うということは，私たち，実習生が，保育を学んでいく上で仲間として見ていてくれなかったのでは，と人に言われました．挨拶のことを疎かにしたつもりはありません．

ロ）一緒に行った学生の出来が良かったのだろうか，いつも比べられた．「～さんは，はきはきしてよかったけど……」というように，こっちが必死で頑張っている時に，ぼそっと言われるとやる気がなくなりそうになるが，でも学校の立場もあるから気にしないで，どこがいたらないか前向きに考えようとした．

ハ）オリエンテーションの時に，園長先生が「一般企業に行くような奴はトイレ掃除もできないような人だ」とおっしゃっいました．一般企業に就職する私にとって，この一言は園長先生に対する印象を悪くしました．言っていいことと，悪いことがあるのではないかな．この人の保育に対する考えはどういうものなのだろうと考えてしまいました．

ここで述べられている挨拶についてであるが実習生が，先生方に対して，「お疲れ様でした」という一言は，日常つい使ってしまう言葉であろう．実習先での学生たちは，先生方と実習生というよりも，今保育をしている側のものとして，実習生自身が挨拶にはかわりがないと考えたのではないだろうか．先生方にしてみれば立場がちがうのである．

大学でのオリエンテーションでは，挨拶についてはかなりの注意をはらっているのであるが，学生自身，言葉上の使いわけがはっきりとはわかっていないように思われる．

このように，言葉ひとつをとってみても，挨拶をする適材適所をわきまえることに慣れていない学生にとって，精一杯の配慮だったことと思われる．また，実習先からもうひとつの注意を受けていた．それは，実習先での研究会などへの出席の際，研究会終了後の挨拶であった．

学生自身は気がつかずに席をたったのであるが，その際「有難とうございました」という言葉がなかったというのである．これは，実習巡回の際に直接いわれたことであった．このような基本的な事ができていないということなのである．

このような感謝の気持ちを示した言葉を学生は忘れているわけではないであろう．こころの中では感謝しているのである．しかし，先生方にしてみれば，何らかのかたちで表現することの大切さを知らせたかったのではないかと思われるのである．このような基本的な生活習慣は，たんに学生たちだけではなく全ての人に共通していることではないだろうか．

次にロ）のことについて考えてみよう．他の学校の学生なのか，あるいは同じ大学の学生だったのかでは大分違ってくる．学生自身が比較の対象にされてしまったということである．ところで，学生自身は一所懸命，実習に取り組んでいても，なかなかそれを認めてもらえない者がいる．学生の中には，普段でも一所懸命やっている

ことが伝わってこない者がいる．そのような時，注意をすると，学生自身としては頑張っていることを聞かされることがある．われわれとしても，そういわれると，半信半疑ながら，ついうなずいてしまうのである．

普段，注意をしていると思いこんではいても，やはり実習先でのことを考えると，その場できちんとわからせておかなくてはならないであろう．

どの学生も，頑張る気持ちは大きなものがある．はじめての経験であり，それなりの考えをもって実習に臨んでいるはずなのである．そこに，たまたま失敗もあり，成功もあるのである．先生方とのくい違いもあって当然のことであろう．けれども，それぞれのアドバイスや注意には，とても敏感に反応し，自分を追いつめてしまうようなケースも少なくないのである．そこで課題にむかっていこうとする学生はまだまだいい方である．自信をなくしてしまうことも多々あることを知らなくてはならない．

ハ）については，年々企業への就職希望者も増えていることは確かである．しかし，養成校にいるわれわれとしては，実習を経験することで就職先は大きく変わってくるのである．今までの経験でも，初めは企業希望であった学生が，実習を終えてみると，保育現場への気持ちが強くなり，保育者としての道を選ぶ者も少なくはないのである．しかし，その逆もある．希望にみちて，実習へ臨み，保育の重みを感じてしまい，企業へと気持ちを変えてしまう者もいるのである．一言でいえるような心境の変化ではないのである．これは，学生たちとの関わりのなかで考えていかなくてはならない問題といえるのである．

(2) 職員と子どもとの関係

イ）職員の方の子どもへの接し方が平等ではないということ．一人の子どもに対して集中攻撃で叱る．職員の方の考え方かもしれないが，私はやりすぎだと思った．そして，職員の方の子どもへの接し方のちがいが大きく，子どももその人の顔色を見て，ころころ変わっていたのでもっと引きつぎをしたり，ひとつの接し方に統一しなければいけないかと思った．

ロ）先生が子どものいる前で平気で「○○ちゃんは，さわりたくない」などと非難するようなことをたまに口にするのです．先生方同士の会議で，子どものうわさ話のようなことを，子ども達の前で話したり……．その場に居合わせた時，いつも冗談にしても，子どもの前でこんなことを言っていいのかなと疑問に思っていました．

ハ）私が怒りを感じたのは，体罰をする保母や指導員がいたということです．草むしりをしている時間に，みんながいる前で，頭を何回かぶったりヒステリックに怒鳴ったり，かと思うと優しく子どもと接している日があったり……．要するに，態度がちがうのです．それから押し入れに閉じこめたりするということもありました．

ここに述べられていることについて，学生たちはつねに，子どもの味方になってしまう．10日間の実習で，学生が判断すべきことではないのであろうが，その場でのやりとりで，ついつい判断をしてしまうことまで止めることはできないであろう．

職員と子どもたちとの関係は，その場だけではなく，長い年月を経て，築きあげられてきた関係であるということを考えてみなくてはならない．そこに学生が入り，勝手な批判をするということは，決して許されることではない．しかし，学生たちの指摘も無視することはできないのではないだろうか．

こうした現場での様子をふまえながら，オリエンテーションを考えることは養成校の教員に与えられている大きな課題のひとつといえるのである．

(3) 実習生と子どもとの関係

イ）一番ショックだったのは，その子は何でも口にしてしまうために，地面にいたミミズを食べてしまったことです．半分口に入れた時に，先生にものすごく怒られ，口から出せといわれているのに，それでも残りの半分を食べようとしているのを見て，かわいそうだと思ってしまいました．その子には，これが食べるものだという判断さえできないのだと思うと，私自身悲しくなりました．しかし，それだけにこの実習は普段の生活では考えられないようなことも経験でき，とても自分のためになり

ました.

ロ)「Yくんは，Sくんが先にぶった」と言い，Sくんは「違う」と言いはりました．Sくんは普段から言葉や行動に乱暴な面があるため，先生はSくんだけを責めているわけではありませんでしたが，どちらかというと，Sくんの方に注意をしていました．そんなやりとりの中で，「そうじゃないんです」と言って，状況を説明したいと思っていたのですが，結局，言い出すことができませんでした．Sくんに悪いことをしたと反省し，それを日誌に書こうと思いましたが，私が書くと，先生が間違っていたと批判するような形になってしまうと思い，書くことができませんでした.

学生たちは，短かい実習期間ではありながら，実習の後では，机上で学んでいる理想像をのり越えて，いろいろなことを体験を通して学んでくる．どんな場面に出会おうと，実際には理想像だけで，保育をしたり，教育をしたりすることはできないということを感じとってくる．実習生として，一番考え，悩むことが，「実習生と子ども」との関係であり，学生自身，めまぐるしく動いている子どもたちと，先生に対して口をはさむチャンスをつかめずに，うろたえてしまっている姿が眼にうかんでくるのである．それが正しいのだろうか，間違っていたらどうしようかと悩み，とっさの判断をするのに迷うようなケースも少なくない．そんなとき，指導者による適確なサゼッションを得た学生のレポートをみることは，教員にとって大きな喜こびとなるのである.

(4)　環境条件

イ）少し不満だったのは，掃除，洗濯が多かった事です．保母さんの一日の流れの中で掃除，洗濯は大切な仕事のひとつなのはわかっているので，やるのは当然なのですが，少しひまになると「次は～の掃除をお願いします」と言われたり，洗濯をしたりなど……．ほす，とり込む，たたむのくり返しで，子どもと接する時間がすごく短かいときもありました．保母の仕事としての掃除ならあたり前と考えてもよいのですが，少し多すぎる日があったのは確かです.

これは，施設での体験であるが，このような掃除，洗濯などについては，必らずといっていい程出てくる問題である．しかし，この事についての感じ方は，学生のもつ意識によってかなり考え方が違ってくることをいっておかなくてはならない．ある学生の施設での仕事について，一日中このようなことで追われていた学生がいた．その時の学生の受けとめ方は，次のようなものであった．掃除，洗濯は日常のあたりまえの仕事としてとらえ，子どもへのスキンシップの一部とも考えていたというのである.

こういった仕事を通して，自分たちの生活をふりかえり，先生方はこんなにも一所懸命に多くの仕事をこなし，そのあい間に子どもたちと接し，子どもたちを理解しているのかと学生はいっていたのである．そして，このような日常の仕事を通して，実習生に掃除，洗濯をたのみ，あいた時間は少しでも子どもたちと接している先生方の姿をかい間見ていたのである.

(5)　日誌・実習生の配当について

イ）実習録には反省，反省，ありがとうございましたばかりでしたが，私は自分をほめてあげたいです．こんなこと社会に出て，あたり前かもしれませんが，今の私にとって，精一杯頑張ったことです.

ロ）日誌に質問を書いても，直接ズバッとした答えが返ってこなくて，「だからどうすればいいの？」という疑問が残ったままになってしまう事が多かった.

日誌を書くということは，学生にとっては一番つらいものかもしれない．それは，多くの学生が「実習日誌さえなければ楽しい実習だったのですが」という言葉にあらわされている．睡眠時間を削り，辞書を引きながら，言葉を選び，日誌と毎夜格闘している実習生の姿が浮びあがってくる.

ところで「言葉を選ぶ」ということはとりも直さず，受け入れ園に対して，否定的なことばとか，批判的なことばなど，そういった文章を書いてはいけないということが前提されている．前回の資料としたレポートにも，自分の気持ちを素直に書けない苦しさをつづったものがあった．しかし，今回のものには，それほど目立ったも

のはなかったように思われる.「日誌」についての事前指導がいき届き，書く枠がきめられているとき，それで十分という学生が多くなったということであろうか.

(6) 職員と職員との関係

イ）保母さん同士で，子どもの家庭のうわさ話しを近所でよく，おばさんがしている井戸端会議のようにしていたので，各家庭のプライバシーを守らないといけないと思いました．やっぱり職業柄，知ってしまうけど公表してはいけないものは秘密にしなければならないし，あまり，根ほり，葉ほり探るのはよくないと思います.

ロ）私の実習させていただいた保育所では，先生方の人間関係が思わしくないようで，一人の先生について，あれこれと陰口を聞かされ，困ったことが何度かありました．一見，仲良さそうに見えるのですが……入ってみなければわからないものだと感じました．いつも陰口を言われてしまう先生は，今年入ったばかりの先生なのですが，他の先生方からみれば，"気のきかない先生"なのだそうです．言われるにはそれなりに原因はあるのでしょうけれど……．女ばかりの職場はとても恐しいです.

実習生の悩みの中では，それほど多くはないようであるが，先生方の人間関係の板ばさみになってしまったというものがあった．実習生の立場は微妙なものである．実習の最後の日まで，自分の「位置」をきめられない学生もいる．そして，そうした実習生の自分の立つ「位置」というものを，養成校側として，オリエンテーションはむずかしく，全ては実習先にとび込んでからということになってしまいがちなのである[3].

たとえば，「消極的な実習でしたネ」とか「積極的に子どもに接しました」など，これらをどのように受けとめたらよいのか.「消極的」とはどのようなことなのか，「積極的」とはどのようなことなのか，学生には皆目わからないところではないだろうか．消極的すぎる，あるいは積極的ではあるが，やりすぎのところがあるなど，学生には判断のつかないことがあまりにも多すぎるのである．このような試行錯誤を経て，学生たちは成長しているということであるならば，それはそれで良しとしなければならないであろう.

Ⅳ．おわりに

実習が織りなす様々な状況，それによっての学生の感じ方，とらえ方はまさに多様である．それは，個々の学生の実習に臨む姿勢によっての違いであり，また実習先の環境条件によっても変わってくるものである．その中でも人間関係の良し悪しにはかなりのちがいがみえてくるものである．実習先での申し入れをそのままに受け入れる学生，また，それに対して疑問をもつ学生．まさに，いろいろなのである.

実習先の配当については，施設の場合は種類別の希望施設を，また保育所，幼稚園などでは，学生の所在地との距離を考慮して行なわれるが，それらにも全てを満足させることはできない．こういったなかで，学生の個人差，あるいは学生と受け入れ園との相性などによって，その実習内容は変わってくるのである.

実習園や学生も年々，様々に変化をしている．その変化を知ることとともに，それらに対して，われわれがどのように学生たちと対応するか，そのことの重要性がいわれなくてはならない．とりわけ職員への依存，保育への自信のなさなどについての記述をみることは，一般にいわれる今の学生の未熟さだけではないようにも思われるのである．それは「記録者としての女性の眼」[4] をつねに考えていくことではなかろうか.

Ⅴ．参考文献

(1) 三角同：保育実習の諸問題－実習日誌から考える(1)，東京家政大学研究紀要第29集　1988
(2) 三角同・保延成子：保育者養成と社会福祉実習，東京家政大学研究紀要第27集　1987
(3) 本間・岡本編：保育入門—実習を中心として—小林出版　1984　P.11
(4) 柳田邦夫：事実を見る眼，新潮社　1982　P.85

(註)　本稿は第46回大会の保育学会に発表したものに加筆，訂正したものである.